



おーい、でてこい  
と聞こえたかい



tetsu621

本を読みなさい。偉人の伝記が良いですよ。

小学校の頃、先生からだっただろうか、親からだっただろうか、そんなことを言われた。大人から言われた事は守らないといけない。そんな小学生の私は、素直に図書室で伝記を借りた。

エジソン、野口英雄、ファールブル、借りたは良いけど、少し読んだだけで、次の日には本を返した。これを読むのは苦痛だ。だって面白くない。

面白い本は無いのかな。伝記じゃない本はどうだろう。そう思いながら見たのは、一番下の段に20数冊並んでいたシャーロックホームズだった。

面白い。あっと言う間にすべてのホームズの作品を読破。その後は、その隣の棚にあったSF作品をむさぼり読んだ。

きっかけは伝記で挫折したことだが、その後ホームズとSFで、本を読む楽しさと想像する楽しさを知った。ここまでは、我ながら素直な良い性格が育まれていたと思う。

ところが、運命の一冊、というより一遍のショートショートが、素直な私に思わぬ影響を与えた。 星新一の”おーい、でてこい”である。

この希有のショートショート、読んだことが無い人はいるだろうか。

ある日、突然現れた穴に向かって、”おーい、出てこい”と叫び、石を投げ入れる。そこから始まり、その穴にあらゆるものを投げ捨てていく。短いながらも話は展開していき、読者は最後の一行に打ちのめされる。

なんだ、これは。最初、読み終わったときに、物語の意味が分からなかった。何、何でそんなことが起こるの。何、この後どうなるの。 それは読者が後から考えなければならない。

この一遍で私は星新一に魅了された。これ以降、星作品を読み続け、最後の一行を楽しみにする習慣がついた。最後に何か起きないと納得がいかないのだ。

そして、物事を一面からだけでは無く、その裏、さらに裏の裏をいつでも探してしまうようになった。疑い深くなったと言いかえてもよい。 なんかあまり良い性格とは言えなくなってしまった気がする。

それにしても、50年も前に書かれたこの作品、まるで今を予言していたかのようです。

”おーい、でてこい”に出てくる、なんでも飲み込んでくれる穴、これはどんどん発電してくれる原子力発電所かもしれません。

そして、最後に空から聞こえてくる”おーい、出てこい”の声。これはフクシマのあの事故ではないでしょうか。

すると次に石が飛んできて、その後は・・・。

ほら、ね、最後の一行、影響を受けて性格悪くなってるでしょ。